

草の根の熱意

しかし、すでに地元の教育会から発し、一般にも広まっていた美術館建設の大きなうねりが、衰えを見せることはなかった。

昭和32年(1957年)、「財団法人碌山美術館設立委員会」が発足。官民一体となった活動が計画された。

この計画では、行政だけ、資産家だけでなく、県内外の多くの民から協力を募り、民間の財団法人による美術館を設立するというもので、史上類を見ない美術館設立計画だった。

資金の目標額は700万円。その内訳は、東京方面の支援者などで350万円、教育関係で180万円、町で100万円、篤志寄付で70万円とした。



まず委員長となった平林は、県庁に出向き、林虎雄知事、糸魚川祐三郎教育委員長を訪問、さらに長野市にある大手新聞社を訪れて協力を要請した。そして、東京方面には笹村草家人らが加わり、東京国立博物館、東京国立近代美術館、東京藝術大学などに協力の要請をした。財界からは大口寄付の内諾もあり、東京を中心に県外、海外から多くの志が寄せられた。

教育会では、役員たちが県内の教育会、校長会に出向き、協力を依頼した。その結果、南安、東筑をはじめ、全県の小・中・高・大学の児童・生徒・学生までもが、それぞれの分にに応じて取り組みに参加した。

地元では、区長を中心に耕地総代、公民館長が大規模な募金活動を展開した。

そして、産声をあげた

一方、設立委員会は、のちに長崎の「日本二十六聖人記念館」や皇居内の「桃華楽堂(楽部音楽堂)」を設計した早稲田大学教授・今井兼次に設計を依頼。建設地は、碌山生家など4カ所で検討されたが、子どもや若者たちに「本物」に触れてほしいという委員たちの願いから、町が穂高中学校の敷地を無償提供し、建設地が決まった。

しかし、設計は出来上がったものの、建設資金はその時点で20万円ほどにしか達しておらず、施工の成り行きが危ぶまれた。

平林委員長は上京し、笹村とともに、のちに館の顧問となる民俗学者の渋沢敬三を訪れた。



渋沢は大手建設会社を推し、美術館建設の熱意に打たれた同社は、「いかなる犠牲を払っても協力する」と快諾した。

昭和32年7月、ついに建設工事が始まった。低額な請負金額で行われた工事は、資金難から動力が引けず、トラックでワイヤを引いて、猫車を持ち上げてコンクリートを打っていた。難航する工事に、地元の中学生たちは一列になって、瓦を手渡しで屋根に運ぶなど、自分たちができる作業に加わり奉任した。工事は急ピッチで進み、10月末にはほぼ完成した。

懸案だった資金については、本来制限のあった補助金交付に格別の配慮があり、県から70万円、町から40万円が拠出された。これに全国、海外から集まった29万9,100余人の寄付金を合わ

聖地・安曇野

「もし、芸術の聖地があるとするならば、私は本日ここにこの言葉を惜しみなくささげたい気持ちで一杯であります」。

昭和33年(1958年)4月、開館落成式で、発起人代表の浅野長武・東京国立博物館長はそう賛辞した。

安曇野に産声を上げた小さな美術館は、日本でもまれな存在だった。実際に、個人の名を冠する美術館は当時の日本にはなく、パリ

のロダン美術館、スイスアルプス山麓のセガンチーニ美術館に並ぶといわれた。そして何より、遺族、郷土、町、県、教育関係者が一致した努力で、一途に燃え、純粋に伝え得たことは類を見ないことだった。

現在、碌山美術館は、独力で財政基盤を培いながらも、わずかなゆとりが生まれれば、施設の改善、各種講座、企画展の開催など、来訪者のために還元している。

開館35年の折に出版された記念誌には、降旗正幸・編集委員長が、最後にこう締めくくっている。

「碌山美術館が願ってきたことは、財政的豊かさではない。『この館は二十九万九千九百余人の力で生れたりき』は本館入口のレリーフの言葉であるが、これに宿る心こそ、碌山美術館の礎であり、目指すところである」。

碌山美術館50周年記念日・第98回碌山忌 4月22日(火)入場無料

オープニングセレモニー(午前8時30分～)、碌山忌コンサート(館庭)(午後2時～)、開館記念「新宿/穂高 碌山館・碌山美術館～一世紀のあゆみ～」展(6月1日まで)、藤原真理チェロコンサート(碌山公園研成ホール)(要入場料、午後6時30分～、詳しくは下記までお問い合わせください)ほか
圖(財)碌山美術館 (TEL82・2094 FAX82・9070)

参考文献◎
碌山美術館誌、碌山美術館35年誌、碌山美術館報(碌山美術館編)、
孜々として(穂高中学校編)